調和体における淡墨の効果

歳森芳樹
Yoshiki Toshimori

今作は、子規の句集より横物作品を書く事を前提にして、目に止まった数句の中から選びました。

作品を制作する時には、題材を選ぶ事に苦労します。「良い題材を選ぶ事が出来れば、作品は出来上がった様なものだ。」と成瀬映山先生がおっしゃっておられた事を思い出します。しかし実際にはなかなかその様に事は運んでくれません。

そこで今回は、作品を仕上げるにあたり、墨色に工夫をすることに主眼を置きました。墨色といってもその数は無限にありますが、濃墨、普段使うもの、淡墨と三種を試してみました。その中で今回は、淡墨との相性が良く感じ、その効果を生かす方法で制作する事に決めました。

淡墨の美しさの一つに潤筆部の清々しい墨色とニジミがあります。これを表現すべく、色々試してみましたが思うようにはなりませんでした。一方それを際立たせる渇筆部では、前者とは逆に荒々しい筆使いで変化をつけようと挑戦しましたが、腕の緊張がそのまま表れ大胆さが必要な事と痛感しました。

淡墨の潤渇を生かすよう字形は行書を主にしたもので平易に書いた点だけは良かったものと思います。

いつの日か良い題材に出会うため普段から多くのものを学び、そして蓄えを一つでも増やさなければと再確認させられた作となりました。

・用具用材

筆…兼毫筆

紙…台湾画仙

墨…和墨

136×35cm

釈文　観音で雨に逢ひけり花盛り（正岡子規）